２０２１年１１月

公益社団法人浦安青年会議所
２０２２年度理事長所信

スローガン

ＢＥ　ＴＨＥ　ＣＨＡＮＧＥ！
～ＯＰＥＮ　ＹＯＵＲ　ＥＹＥＳ～

氏 名　峰嵜　駿

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症の流行は様々なものを私たちに突きつけました。移動や集合の制限が促したコミュニケーションのリモート化など、生活様式に関する話題は尽きず、新しい時代の幕開けを感じる良い変化もありましたが、人の不安が呼び起こしたであろう多くの問題も顕在化しました。私が心を痛めたのは、人々に広がる漠然とした不公平感や、それが時に「自粛警察」などの行き過ぎた攻撃性を表したこと、また様々な基準や考え方を持つ人が、互いにＳＮＳなどの匿名空間で交わり得ない主張を攻撃的な言葉で繰り返すこと、言葉の切り取りによる炎上、そして不幸を呼び込む陰謀論が蔓延したことなどです。暗澹たる雰囲気は新型コロナウイルス感染症流行後の世界にも暗い影を落とします。これらの問題の元凶を、例えば匿名ネット空間の在り方や、耳目を集めたいマスコミの報道姿勢という構造上のものに終始させてしまって果たして良いのでしょうか。

この問題を他責には出来ず、私たち一人ひとりが時に攻撃性を持つ生物であることを自覚しなければなりません。なぜなら自分の意図に関わらず、相手が「攻撃」だと受容すればそれは攻撃なのです。今、昔と比べ多くの人たちが自らの立場を理不尽だと認識し、声をあげられるようになりました。そして、その声に気付いた人たちも問題を認識して意識を変え、まだ理不尽に気付かずアップデートされていない人と対話していく中で、徐々に社会は変わっていきます。私たちは常に相手に及しているかも知れない理不尽への感性を磨き、「もし相手の立場であったら」を考え、アップデートし続けなければなりません。どうしようもない些細な違いを持つ隣人が、声をあげられずに理不尽な思いをしてしまっているのかも知れません。空気を読むこととは異なる「正しい想像力」が人を攻撃性から解放するのです。

人と人の違いというのは人類の財産です。私たちはどうしても独りよがりになりがちです。その殻を砕き変化を起こしてくれるのは、常に自分と違うものを持った他者です。人は人で磨かれます。心にざらつきや騒めきを起こす相手と出会った時こそ、自らを成長させるチャンスであるはずです。それは自分に馴染んだ心地良い考え方を捨てるという苦しい過程を経るかも知れません。た

だ、相手の見ている景色を見ようと努めた時、目から鱗が出るような経験をしたことはありませんでしょうか。「正統は秩序を生み、異端は活力を生む」と言います。私たちは、常に異端から活力を補い、社会の停滞を防ぎ、活気ある未来を創っていかねばなりません。

さて、私は浦安の外から来た謂わば「異端」の人間です。この青年会議所に入り、過去自分の周りにいた人とは違う毛色の人たちと出会い、愛をいただき、大きく変わることが出来ました。一度交わってしまえば、このまちは私に安心をくれる大切な場所になりました。義理と人情に篤い人たちに囲まれ、このまちで家庭を築き幸せを感じています。しかし思うのです。もし、私が青年会議所におらず、たまたま浦安に腰をかけただけであったなら。このまちへ愛着を持ち、人と交わろうとしたのでしょうか。流入した新しい住民や、市外で勤務している住民も多い割には、外からの新しい風に抗うような磁力を私は感じることがあります。同時に青年会議所でも、メンバーを枠に当て嵌めるようなベクトルが働いていると感じる時があります。私が自分と異なる人と出会えて学びを得たように、私も自分と異なる人の学びの一助になると信じたい。であれば、より多くの人と交わり、青年会議所としては“Ｔｏ ｂｅ ｔｈｅ ｌｅａｄｉｎｇ ｇｌｏｂａｌ ｎｅｔｗｏｒｋ ｏｆ ｙｏｕｎｇ ａｃｔｉｖｅ ｃｉｔｉｚｅｎｓ”に邁進しながら、対話の出来る空間を重視し、浦安や青年会議所に新しい力をもたらしたいと考えます。

なぜなら、浦安は潜在的可能性溢れるまちだからです。新型コロナウイルス感染症の流行前は海外から多くの人が訪れる都市でした。成田国際空港を擁する千葉県は、東京・大阪に続く訪日外国人数を誇っており、その中で成田市に続く人数を浦安は受け入れていました。ポストコロナの時代が早晩訪れるとすれば、再び浦安市に多くの人々が訪れてくれるでしょう。これは浦安ならではのチャンスなのです。海外から来た人々とはやはり言葉が違い、文化が違い、考え方も違う人たちが多いと感じます。世界中の理不尽や課題に敏感であれば、世界の人々との繋がりもより意義深いものと出来るでしょう。人々がこの地域に住んでいる本当のアドバンテージを活かし、世界を感じて繋がりながら、海外の人たちに限らず、人と人との違いを楽しみ活躍できる人材を輩出していくことで、この浦安は人々を受け入れ、成長させ、力にして行く大きな器として、益々輝かしい発展をしていくことになるはずです。

浦安という舞台で他者と出会い目を見開き、自分を絶えず変化・アップデート出来る人材を増やすことが私たちの運動であり、一年間の使命となります。

【多様な世界と繋がって行く】

世界中の人々と交わるには、世界中の問題に「正しい想像力」を働かせる能力が必要です。世界は繋がっていて、自分や自分のいる地域だけが良ければ良いという発想が最早成り立たないのは自明です。温暖化をテーマにしている科学者の９７％が原因は私たちを含めた全ての人類がもたらすＣＯ２の排出と関係していると論じていますが、その温暖化は数々の気候変動などの原因になっ

ていると言われています。また、絶えず動き続ける国際情勢は緊張感を増しており、明日の平和が保証されているわけではありません。途上国への搾取とそれへの傍観は政治的安定性を棄損する下地となり、結局は物価や生活の安定を阻害する要素となっています。しかし、自明なことではあっても、なかなか自分のこととして捉え、行動を変えていくのは難しいものです。

それでも、ヒントはあります。今７割の人がマイバッグを持ち歩くよう心掛けているそうですが、その理由の８割がレジ袋の有料化を挙げています。導入時は賛否両論があったものの、この例は取り組みやすくインセンティブがあれば、人の行動・習慣が変容するということを強く示しています。勿論、インセンティブはきっかけであって、最終的には当事者意識をもって問題に当たれるようになることが必要です。浦安では選挙の投票率が低く、それは身近な問題を自分たちで解決しようという意識の強い人が少ないことを表しています。「私の一票で結果が変わるとは思えない」、また「誰が当選しても同じ」と言った声が、投票に行かないことや、選挙に興味がないことの理由の上位を占めていますが、これは裏返せば自分の行動に何らかの結果、手応えを求めているものと言えます。つまり、行動の結果を身近なところでわかりやすく示せなければなりません。そのためには、世界が舞台であっても、大きな主語で語るより、ローカルの単位で出来ることを示すというのも有効な方法です。

身近なところから問題解決を実践するということは必ずしも物理的な近距離の範囲に利益を及ぼすことだけに留まりません。今出来る自分たちの行動が世界中の問題に対し、解決の糸口となることに気付くことも有効です。結果や手応えを重視するのであれば、例えば途上国の一地域を選び、それに対する行動を起こすことは、効果をわかりやすく実感することに繋がると思われます。または、自分の想像が及ばなかった多様な世界に対して、アクションを起こせたという結果が、市民にとっても世界と繋がった一つの成功体験となり、新たなチャレンジに結び付いていくインパクトになると信じています。

地域の青年会議所は、このような問題解決の仕組みづくりを構築できる唯一無二の団体です。身近な問題として人々に世界の問題を改めて提起し、結果を出し、目に見えるように検証し発信する。これにより多くの人に気付きを及ぼし、さらにそこで自分の行動による成果を実感できた人は、今度は自ら行動を起こしていく。青年会議所は元々そのように社会問題を解決する事業を構築してきたのです。パートナーシップを構築した上で、周知やリソースの収集を協働し、浦安での行動が世界に繋がっていく実感を積み重ねていくことで、世界中のことを自分のこととして感じられ、変化を起こせる人がこのまちに溢れていけるよう私たちは努力していかねばなりません。

浦安は全国上位の財政力を背景に住民サービスが充実していると言われて来ました。しかしながら、震災があり、コロナ禍があり、充実した財政は当たり前に享受できないことや、自分たちで社会的な貢献をせずには未来は約束されないことに一部の方は気づき始めています。一人ひとりが自分の地域から自分達の問題を解決しようとする当事者意識を根付かせていくことが今求められています。ここには海もあり、親しめる水辺があります。海外から来た居住者も

多ければ羽田・成田への便も良く、住民も都内勤務者や市内勤務者のバリエーションに富んでいる。世界中の問題や、ＳＤＧｓで設定されている問題など、多くの課題にアクセスが可能です。

惰性の中から優秀な人材は出て来ません。浦安の名前に甘えてきた居心地の良さから脱し、この地域から出来ることをもっと考え、より良い社会と自身の未来を勝ち取るために、地域から世界の課題を解決する姿勢を示します。結果、人々は自分の可能性に気づき、自身をアップデートさせ、ここ浦安から堂々とした強い輝きを放つようになることでしょう。

【多様な人々との交流】

浦安青年会議所のこの１０年の運動には非常に先駆的だったものが多いと感じています。特に政策提言書に示されていた浦安の財産は、前述したように海外から来た人々をはじめ、多様な背景を抱える個人・団体が多いということです。私たちはこの多様さを包括しての浦安であるということを忘れてはならず、更にそういった個性を活かしたまちづくりこそが、浦安市の総合計画にも示されているように活気とレジリエンスある魅力的な都市を築くために必要なことなのだと言えます。

ただ、例えば海外から来た方との関係であれば、言語や文化や生活様式が異なるがために、お互いの距離を縮めるということはそう簡単なことではありません。どうしても自分と違ったものや知らないものには警戒をし、何かと抱きがちな誤解を解くにも時間がかかります。しかし、青年会議所には成功体験があります。青年会議所もまた多くの職種、入会しなければ交わらなかったような人たちが集まっていますが、事業に対して共に汗をかく度に、かけがえの無い仲間となっていきます。特に、全力で勝負に向き合う子ども達の成長の場として例年開催しているわんぱく相撲は、仲間同士の距離を縮める機会として大きな役割を果たしていました。「子どもたちのため」という心を共通の言語として、青年会議所は絆を紡いでいったのです。

今、世代間、人種間、性差間などといった様々な対立を煽る言動をニュースやＳＮＳなどで多く見ます。しかし、私たちは逆を行きます。その差と違いを財産とします。もっと事業に多くの人を巻き込み、多様な人たちと交流し、力にして行きます。自らと異なる考え方や育ち方をした人と繋がり仲間となることで、世界が広がっていったという体験は、メンバーであるならば誰でも持っているはずです。青年会議所内で完結するのではなく、出身を超え、世代を超え、業種を超え、よりたくさんの人と交わり成功体験を積むことで、成長をし、その姿を皆で確かめ合うことが出来ます。

さらに、多様な市民が活躍するまち浦安において、その潜在的な力を顕在化させるために、人々が交差する継続的フィールドとして、求心力のあるコンテンツを利用します。わんぱく相撲における体験を人々の交流の成功例として先述しましたが、子どもも、大人も、男女やそれ以外の性も、障碍者も、市民が集まって体験したいと思えるプロジェクトを始動します。さらに、それは継続

出来るような工夫を盛り込まれることで、将来私たちの手を離れ、より多くの方が多くの方を巻き込み、個性と個性の出会う「仕組み」としてバージョンアップされ、浦安の変化を起こす起点となります。

新しいことや馴染みのないことに触れるのには不安が付き物です。しかし、その不安を好奇心に変えて大きく世界を広げることで、多くの人と手を携えつつ浦安を活性化させてまいります。

【多様性を包括する持続可能な組織】

青年会議所の成立から１００年以上が経っていますが、青年のネットワークであり、成長の機会であり、社会問題についてコミュニティを巻き込み「仕組み」で解決するというこの組織の目指すべきところ、在るべき形は今でも変わりはありません。しかし、その形態は変わっています。

生真面目な雰囲気のする修道院で行われていた会合は、会議室やコンベンション会場での開催に変わり、昨今のコロナ禍ではパソコンと電波の中でも存分に行えることがわかりました。資料についても手書きからワープロ印刷となりましたが、今では電子媒体が主要なものとなり、紙媒体忌避の考えも強くなる中でその削減にも一役買っています。確かに昔ながらのやり方にはその良さもありますし、それを忘れるべきではありません。しかし、最早ノスタルジーからそこに拘泥することは避けねばならず、その時その時の狙いに即した柔軟な活動形態が求められています。

今、青年会議所の構成メンバーの環境は変わってきています。組織を構成するメンバーの属する年代において、計算上の可処分時間の平均値はあまり変わっていないと言われています。しかし、この年代の多くは共働き・核家族となり、さらにはジェンダーが平等とすれば、当然家庭でも双方に家事や育児の負担がかかります。さらに、自分で時間をコントロールしやすい経営者層だけではなく、今は多くの被雇用者も関わってくれるようになり、私も入会時はそうでした。勤務先や家庭に活かせる学びがあるからと言って、青年会議所メンバーであることを理由に仕事や家族を犠牲にするべきではありません。であるならば、これからは細切れの時間を利用するなど、メンバーはより多様な形で組織に貢献してもらうことになります。使える時間への制約が増した今、まさに誰一人取り残さない持続可能な組織に生まれ変わる必要があります。

先述のデジタル化は一層注力すべきであり、理事会の開催方法、審議する資料の種類、決裁の方法等、ルールはもちろん明文化されていない慣例も、各々の目的に沿いつつ、スマートな方法へと聖域なく見直しを図らなければなりません。日本青年会議所では「育ＬＯＭ」の推進や、「ベビー・ファースト運動」を行い、子育て世代に配慮した組織づくりを推進していますが、我々はさらにその一歩先を考えましょう。公平で新しいルールの下、志と責任感さえあれば誰しもが中心的役割を担える組織になれるよう、試行錯誤を繰り返しながら皆で意見を出し合い組織をブラッシュアップしていきます。

また、組織の常態として特に問題であるのは、女性会員や役員が非常に少数であることです。日本がジェンダー平等後進国であることは有名ですが、この汚名を返上するためにも、まず青年会議所自身が変わらなければなりません。男性会員は自分の配偶者が入会を希望した際、果たして二つ返事で許可できる環境を用意しているでしょうか。このような「もし」を想像し、変わっていくことで、私たち自身がまず男らしさや女らしさから解放されます。それは新しい組織の形と運動の力強さを自然と育むはずです。

さらに、青年会議所が多種多様な人々で構成され、ハートフルで活気ある姿を体現することが出来ていれば、社会に貢献したいと思いながら何から取り組めばいいか手をこまねいている方々も運動に加わっていきます。浦安青年会議所は、デジタル媒体も含め、ＳＤＧｓをはじめとした社会貢献活動とそれに取り組む自身の姿を今以上に発信していきます。当然今までの成功例を踏襲した会員の拡大も進めてまいりますが、更にブランディングを活かした拡大の仕組みについて構築を図ることで、誰もが拡大に取り組むことが出来る組織となり、遂に持続可能な組織と成ります。

身を切り裂かれるような思いをする選択肢を取ったとしても、新しい時代に向けてそれを恐れず、価値ある組織の一員としての誇りをもって、新しい青年会議所の姿を全員で示してまいります。

【むすびに】

なぜ、私たちは自分と異なる他者と接したとき謂われない不安を感じるのでしょうか。それは私たちが他者から及ぼされる影響を恐れ、自分自身の変化を恐れているのが一番の原因かも知れません。変化を起こすということは自分を変化させていくということであり、それは今の居心地の良さを自分から手放すということです。

振り向くな　振り向くな　後ろには夢はない
去り行く一切は比喩に過ぎない

未来は今の延長線上にはありません。青年会議所がまず変わらなければ青年会議所自身が過去の遺物として取り残されます。危機感と希望を持ち、人と組織の多様でオープンなあり方を活力として、持続可能な明日を創るために、今ここで大きな変化とインパクトを。

【事業計画】

１．世界の問題に浦安市民が関わっていくための実践的事業の実施
２．誰一人取り残さない持続可能な組織の確立
３．組織内におけるジェンダー平等意識の確立
４．多様性や社会貢献を重んじる組織としてのブランディング広報の実施

５．２１名の会員拡大
６．第３５回わんぱく相撲浦安場所の開催
７．ＯＢ親睦会の開催
８．対外交流事業の開催
９．多様な人々の求心力となる事業の開催
１０．総会の開催
１１．卒業式の開催
１２．ＳＤＧｓに関連する事業の実施・協力
１３．友好団体との連携・協力
１４．公益社団法人日本青年会議所への積極的な支援・協力
１５．公益社団法人日本青年会議所、関東地区協議会、千葉ブロック協議会の諸会議・諸大会・諸事業への積極的な参加